

中田英樹著

『トウモロコシの先住民とコーヒーの国民
—人類学が書きえなかった「未開」社会』

(2013 有志舎)

猪 瀬 浩 平
(PRIME 所員)

「おらっちの生活は自立つづのになっただけ
い」(新坂光子)

この言葉は、埼玉県東部の農家出身である新坂光子さんの言葉である。光子さんには身体障害があった。1980年代になろうとした頃に、この街で始まった障害者運動「わらじの会」に参加する人々は、農家の一室(のちに、わらじの会の人々によって「つぐみ部屋」と名付けられる)に寄り添って暮らす彼女と、同じ障害を持った妹の幸子さんと出会う。運動の人々(その多くは、農家の周辺に生まれた新興住宅の住民だった)は、その暮らしぶりと、途切れ途切れの会話から、「遅れた農村の中で、家の中に閉じ込められて生きる可哀そうな障害者」として彼女たちを理解する⁽¹⁾。そんな出会いの後、彼女たちを花見や東京見物など、家から町に出るための様々な活動に誘うとともに、電動車椅子取得など様々な手続きや、お金の計算も教えていった。運動の人々が夢見たのは、彼女たちが自己決定のもと家族からはなれ、介助者をいれて「自立生活」を行う姿だった。「村の中で悲惨な状態に置かれた憐れな障害者」の理解の先に、「自立生活を行い、運動の主体となる障害者」を思い描いたのである。

やがて彼女たちは、実家から分家して一軒の家を建て、自立生活を望む若い障害者たちに開放し

生活ホームとする。姉妹は入居人であり、また大家となり、近隣の主婦や学生を集めて介助者とする暮らしを始める。長年同じ姿勢で暮らしていたため褥瘡が悪化した光子さんは、それでもストレッチャーに横たわり、駅頭で介助者集めピラ配りの先頭に立った⁽²⁾。彼女が冒頭の言葉を発したのは、そんな頃だった。

自立生活が「実現」し、ほかの障害者のそれを支える立場になったまさにその瞬間、当事者自身が他者から与えられた「自立」という言葉そのものを使いながら違和感をさしはさむこの語りは、アメリカの自立生活運動の影響の色濃い日本の自立生活運動論の枠組みを、あるいは我々の「自立」観を揺さぶる強度を持っている。さらに言えば、農家の暮らしと、障害者の自立生活の間を揺れ動く彼女の生活の変遷は、障害者福祉論や農村社会論の狭間にあって、どちらの言葉にもなかなか容易く回収されない。その事実気づかされた時、これまでの障害者運動論や障害者福祉論、あるいは農村社会論という知の枠組みでものを考えようとする人々を躓かせる。

中田英樹が本書で問題するのは、まさにこのある知の枠組みでものを考える人々が躓く、その瞬間のことである。それは端的にいえば、「私たちの他者を理解するという行為が無自覚に孕んできた問題点を、新たな角度から問い直す(中田

2013：9）」ことを意味する。

中田が10数年の調査の後に書き下ろした本書は、中米グアテマラに暮らすマヤ系先住民という「他者」をシカゴ大学に属する文化人類学者たちが如何に「理解」したのかを、明らかにする。彼らは、「科学的方法」としての参与観察法によって、農業のあり方、生活サイクル、食事、祭礼、迷信のみならず、果ては精神異常者や近親相姦事例に至るまで、詳細な調査を行い、膨大なデータを残す。そのうえで、マヤ系先住民とは何者か、未開社会とはいかなる社会かをめぐる様々な理解を導き出す。

これらの理解には、対極的な潮流がある。一方に、マヤ系先住民という「他者」も先進国に住む「我々」と同じ経済合理に基づいて生きているという理解がある。アティトラン湖畔で本格調査を行ったソル・タックスによって示されたこの理解は、同じシカゴ大学の経済学者W・シュルツと接続されることで、後に「緑の革命」をめぐる理論を生み出す。他方、タックスよりも若い世代に属するシカゴ大学の人類学者であるポールはマヤ系先住民の世界を先進国世界と断絶した閉じた社会と設定し、そこに駆動する「我々」とは違う独自のメカニズムを「解明」する。これはE・ウルフの「閉鎖的共同体」モデルを介し、後に「モラル・エコノミー論」として力をもつこととなる。

中田はタックス、ポールいずれの議論も他者を一方的に理解する暴力装置に基づくものであったとして批判する。そのうえで、これらの調査が実社会に「役に立つ」学として応用されていく一方で、見落とされてきたものの意味を考える。注目されるのは、タックスをはじめとするシカゴ大学の調査に協力した先住民ロサーレスの「躰き」である。人類学の専門教育を受けていないという理由で、外国人人類学者によってアシスタントであることを余儀なくされたロサーレスは何に躰いた

のか。

中田が目にするのは、ロサーレスがアティトラン湖周辺に暮らす人々を見る眼差しである。人々の暮らしに密着しているその眼差しが捉えてしまうのは、アティトラン湖周辺の高原地帯に住む先住民たちが、そこから南へ山を下りた平野に広がる大農園の狭間にトウモロコシ自給用の畑を持ち、そこで様々な人々と交わっていた点である。つまり、アティトラン湖周辺の人々にとって、社会は閉じていない。

どのような土地にアクセスをもっているのかという視点で先住民の社会を捉えようとするロサーレスに対して、ポールは誰が土地をどれだけ私有しているのかという観点から議論を組み立てる。その結果、アティトラン湖周辺の高原地帯に登記された土地を持つ人びとと、南の平原地帯の無主の農地で自給用の作物を作る貧しい人々との間に断線を引き、後者をアティトラン湖周辺社会の分析するための対象から切り落としてしまう。ここで中田が目にするのは、ポールの分析自身が土地の持ち主を確定させ、開発をすすめようとする国民国家の運動と共振してしまう点である。タックスが「経済合理性」を見出すのも、実は先住民自身が十分な労働を行っていること——そうでなければ、大農園での強制労働が義務づけられた——を国家に申告したデータに基づいて構成されている。ロサーレスが目にした人々の姿には、ポールやタックスの調査——中田はそれを「鳥の眼」によるものとする——がこぼれ落とした領域を、さらに言えば国民国家の支配が貫徹していない領域の存在を喚起する。

しかし、ロサーレスは虫の眼によって見出した、高原と平野の往復運動、近代的所有概念を越えた土地との関係、労働の有り様といった、人々の多元的な暮らしの構成を、まさにその多元性故に文化人類学的分析枠組みに落とし込めず、躰く。ロサーレスの師であるタックスは、そういっ

た細部を「例外」として注釈に押しやるように彼に助言する。ロサーレスは、それでよいのだと深く安堵する。結果として、後世に残り、またそれが「実用に資するもの」となるのは、タックスやポールが記述しえた人々であり、ロサーレスを躓かせた生活の必要から南部に自給用のトウモロコシをつくりにいった人々は記録から消されてしまう。膨大な資料の検証の先に中田は、そんな書かれなかった人々の姿を現前させ、私たちをもう一度ロサーレスのように躓かせる。

中田が文化人類学者に向ける批判は辛辣である。しかし、彼が批判するタックスやポールの理論が他者を捨象してしまった理由を、彼らの無知さや傲慢さに帰するわけではない。たとえば中田は、タックスは、先住民も経済合理性を持っているという自らの発見が国家の労働力整備そのものの産物であることを理解したうえで、確信犯として議論をおこなっているとす。それはまさに、彼が生み出す言説がグアテマラ国家の他者理解に参照されることを知っていたからである。問題なのは、この時先住民はタックスによって救済されるまったく受け身の存在とされていることにタックス自身が無自覚である点である。中田の丁寧な批判の構成は、まさに現在の文化人類学者自身がタックスやポールと同じ轍を踏んでしまう危険と背中合わせにあることを教える。

さらに言えば、たとえ読者が文化人類学者でなかったとしても、安全な場所は用意されていない。それは中田の問いかけが、我々の「他者を理解すること」そのものに向けられているからだ。「トウモロコシの先住民、コーヒーの国民」と同様の対極的理解は、たとえば異文化に生きる人々や、障害者やホームレスといった「社会的弱者」を「理解」する際の枠組にも内在し、私たちはそれに気づかないままにある人々の姿を忘却していく。重要なのは、理解が誤解であることに気づき、

躓きながら、それでも他者と交わり続ける身振りであろう⁽⁴⁾。

だから、本書の問いかけは今・ここにある私たちの他者理解にも向かうべきものである。さらにいえば、平和研究者としての私たち自身が他者との出会いで躓いた瞬間、あるいは思考停止にした瞬間という不気味な記憶を思い起こす必要がある。

その一つの例は、2011年3月に始まる東京電力の原発事故の「被害者」に対する「理解」があげられるだろう。これまでの原発事故の被害者に対する理解は、「全てを奪われた被害者」と、「脱原発運動に動員される主体」の対極的枠組みしか用意できていないのではないか？ この枠組みに留まる限り、例えば放射能で汚染された土地で農業を持続することを決断した人々は不可視のものとなる。同時に彼らが生産する農産物は、たとえ科学的に放射性物質の検出が不可能であったとしても「あってはならないもの」として無視されてしまう。

私が出席した、ある原発事故をめぐる集会では、被災地の農家を招いて話を伺った。出席する人々の質問は、その人や仲間たちがこうむった被害の状況に集中し、彼が放射能汚染地帯の中でも安全な農産物を作ることを決断し、その後様々な取り組みを行っている現在には向けられなかった。

本書はそんな「不気味な存在」に向き合う覚悟を、私たちが失っているのかもしれないことを告発する。そして予定調和ではなく、緊張関係を伴いながら他者と対峙し続けること、そのしんどさの中で考え抜くこと、そのことの覚悟を私たちに突き付ける。

註

- (1) 実際、家に行ってみて、びっくりした。むこうもびっくりしたけど、こっちもびっく

りしたのだよ。飯もろくにたべていないは、風呂にも入っていないは、障害者ばかり固まっている。障害者だからこんな悲惨な生活をしているんだと、まして田舎だからこうになってしまうのか、と最初はどうしても思ってしまったんだよな（山下浩志 20060520）。

- (2) 記録には、一八回の行動をほぼ皆勤したのは光子さんだったとあります。

「介助にきてくんろ！」

光子さんは、ストレッチャーに横になって、手首にハンドマイクを縛りつけてこう呼びかけ続けました。オエヴィスに介助の申し出の電話が入ったと聞くと、

「オレの声が聞こえたんだいなあ」

と言っていい顔をして笑いました（わらじの会 1996：29-30）。

- (3) 冒頭の障害者団体である「わらじの会」は、青い芝の会の横田弘が障害者の健前者および健前者幻想に対する闘いとして定義したものを敷衍し、障害のある人々とそれにかかわって生きる地域の人々の日々更新される交わりを闘争（ふれあい）と表現する。闘争とは、まさに相互に躓きながら交わり続ける関係性のことであろう。

参考文献

わらじの会、2010『地域と障害：しがらみを編みなおす』現代書館